

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会
〒136-0081 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

これからの被爆体験継承活動を考える

市村 聖治

今年も広島で被爆者の皆さんと交流しながら、体験を引き継いでいく世代としてさまざまなことを考えさせられた。

その第一は、「国民は戦争犠牲性をひとしく受忍しなければならぬ」という、いわゆる国の「受忍論」の誤りをもっと宣伝しなければならぬということである。被爆問題に直接関心をもたない若者でも、アジアの国々と交流する中で日本の戦争責任問題に目覚めていくケースは多い。こうした若者たちは、日本のお寒い戦後補償に怒りを感じている。

そこで、長年「受忍論」を批判し、国家補償実現のため奮闘してきた被爆者たちと、こうした若者たちの怒りが共有できれば、運動の輪はさらに広がると思う。その際、被爆者とアジアの戦争被害者を対置させるのではなく、私たち若者がそれぞれの被害の実態を直視する必要がある。被害を「相殺」したり、アジアの人々に気をつかって被爆の実相に耳を閉ざしてしまおうようなことがあれば、喜ぶのは歴史の事実を歪めようとする一部の勢力だけだ。伝えられる被害を、しっかりと

私たちが受け止め、戦争被害を総体としてつかんでいくことが求められよう。その点では、被爆の実相が核保有国だけでなく、もっと近隣アジア諸国にも伝えられ、「原爆投下が終戦に役立った」といった根強い神話を吹き飛ばしていくことも課題だろう。「受忍論」の克服なしには、戦争被害者への国家補償はありえない。

第二に、被爆者の「核の傘」とは原爆きのこ雲」という指摘をさらに広げることだ。残念ながら、最近の世論調査では、日米安保条約を認める意見が多くなっているが、被爆者の指摘によって、安保条約には反対できなくても、せめて「核の傘の下には入りたくない」という考えが広がるだろう。そして、この問題こそ、在日米軍基地問題や沖縄問題などを解決する糸口になるはずだ。

さらに、各種調査でも指摘されているが、若者たちは地球環境の行方にとっても敏感である。原発問題や地球環境の問題を入口にして、被爆問題にまで広げていくという運動もより一層積極的におすすめされていだろう。とりわけ、世界的に原発を減らす傾向がある中で、日本だけが未だ原子力に頼ろうとしているのは異常と言える。ヒロシマ、ナガサキの核の被害を直視し、核兵器廃絶の問題にまで関心を拡げられるような運動も必要だ。

最後に、具体的な運動をすすめるにあたって、日本では現在、ボランティア活動に積極的な若者が増え、文部行政も青少年の深刻な問題を受けて、ボランティア活動への参加を積極的にすすめるようとしている点に注目したい。日常的なボランティア活動として、被爆者を訪ね、お世話をしながら、被爆の経験を聞き、交流していくプログラムをつくれないうか。学校教育や社会教育の場で、具体的、日常的なモデルをつくってみたい。

被爆者の「人間として死ぬことも、人間らしく生きることも許されなかった」という体験談は、自殺や凶悪犯罪に走る青少年の状況を変える大きなきっかけになるだろう。

被爆者の話を聞けば聞くほど、その壮絶な経験を理解し、広げていくことの困難さを感じてしまう。けれど、体験を聞く中から「二度と被爆者をつくってはならない」という想いだけは共感できる。その共感を広めるために、高齢化がすすむ被爆者と若者たちが交流する機会をさらに広げていきたい。

(日本青年団協議会事務局局長)

久保山すずさんの言葉に永い運動をしのぶ

—日本母親大会の見学分科会展示館で—

「みなさん、人間が人間を殺してよいものでしょうか。人間が人間を殺す兵器を許しておいてよいものでしょうか。死の床に横たわりながら、死の直前まで、夫はこのような恐ろしいものを許しておくことはできない、どうしても無くしてしまわなければならないと叫びつづけました。このような恐ろしい兵器があるかぎり、私たち日本人は生きていくことができません」。

七月三〇日、日本母親大会の見



エンジンの激励を受けスタート

展示館前から「反核平和マラソン」出発

21世紀への平和のかけ橋となつて走ろう。八月五日、「二〇〇〇年反核平和マラソン」が第五福竜丸展示館前を出発、二日間かけ東京―箱根間をつなぎ、各地での平和マラソンに呼応しました。

新日本スポーツ連盟などが主催する反核平和マラソンも福竜丸を起点とするのは五回目、「毎年福竜丸に触れ、暑い中を走って自らの精神を奮い立たせている」というファンははじめ七十人余のラン

ナーが「核兵器廃絶」のゼッケンをつけ集いました。

船の周りを一周したあと、真夏の陽射しが厳しいエンジンの前がスタート地点、「エンジンの速力七ノット、さあゆつくり行こう」との平和協会のピストルの号砲を合図にスタート。沿道に核兵器を無くしましょうと声をかけ、「手を上げてこやかに走行」。道行く人もさかんに手を振り激励しました。

原爆忌東京俳句大会に協会賞

八月六日、東京北区の教育会館で第31回原爆忌東京俳句大会が開かれ、第五福竜丸平和協会も後援、協会賞を贈りました。大会は原爆投下55年の広島に思いを寄せ、被爆地首長のメッセージ、横川嘉範東京被団協副会長の挨拶、詩人江口季好さんの記念講演があり、「死んでいった人たちの願いを引き継ぎ、核兵器のない21世紀へ」の誓いを新たにしました。

大会に全国から寄せられた俳句は一四六句、東京都知事賞をはじめ多くの受賞作から、海老名衣子さんの一句が平和協会賞に選ばれました。

尾の切れし蜥蜴はりつく兵の墓
また、大会の30周年記念事業の『原爆句集2』が当日刊行され、第一集以来二十年近く、時を越え平和を紡ぎ刻み込んできた歩みとその集積の重み、苦勞と喜びを共にしました。

九月二十三日には、同大会実行委員会、新俳句人連盟、第五福竜丸平和協会の主催により第20回久保山忌句会が展示館で行なわれま

徴用船の乗組員、遺族の姿もみられて

― 焼津で「平和のための戦争展」―

八月十六日から十八日まで焼津市文化センター展示室に於いて第一回焼津「平和のための戦争展」が開催された。第一回として、市も後援(予算支援)する下で、従来の市民団体毎個別的に行っていた平和展を統一して、共同の実行委員会を組織した本格的な(一回目の)展示会とする呼称による。

■内容の柱は二つ。

▼戦争がもたらした焼津漁船への徴用に伴う地域の産業とくらしを直撃した壊滅的打撃・犠牲の実相を明らかにする。

▼ビキニ水爆実験―第五福竜丸被災を中心として(焼津、県下被災漁船)の実相と事件を受けた地域の人々の表情や様々な関わりの様子を提示する。

実行委員会では、特に次の世代を担う若い人達との接点のあり様を大切な課題とし、内容のしぼりと受け止めの効果性を議論・検討

成瀬 實

していった。

21世紀―核兵器も戦争もない平和な世界をこそ―のために

ビキニ水爆による被爆体験の焼津の漁民、街のくらしにふれた当時の学校現場のあり様、熱意ある教師たちの平和教育実践(平和希求の声・文集・乗組員との交流)の姿をせむ。

▼また、平和のための映画として、子どもたちに「パパママバイバイ」、戦争の終わった日本から街を脅かす危険な米軍機訓練の悲劇を今の子どもたちの心の中にゆさぶりを。

中高校生・大人には、「第五福竜丸」物語。

地元ロケもあって、またエキストラに出た人たちが、懐かしさ、事件の悲しさをかみしめることで市民の関心は高いものがある。

活動の中では、若者たち(「かえりネット平和グループ」)も積極的

に参画し、三つの推進班(徴用船・ビキニ水爆・平和映画)にも分かれて、テーマ毎の研究・調査・展示製作活動に加わって、会の推進に大きいエネルギーを与えてくれた。

■開催に先立つ宣伝活動

できるだけ広範囲へと、市広報では二度に渡るお知らせ案内、三種類ほどの内容主体のビラを作成し、市の公民館等出先機関・市内小中学校・店舗・駅頭(若者)・一般新聞折り込み等々を展開した。

七月中旬から開催間際まで「たまり」場(市民体育館一隅)を確保し、準備活動・打ち合わせに専念してよいよ当日を迎えた。

■開催結果

十六日・午後からの初日。入場百名、二日目は終日とあって、展示会二四〇名。同日の小ホール映画会は子ども部(2回)五七四名・夜が一六〇名・合計七三四名。この日は近接する両会場を往來する人々で賑わった。

最終日は(次の予定が詰まって)午前中のみとなったが、一〇九名。展示会合計は七五〇名にものぼった。午後もあると思っただけで、見た人が何人もいた。

会場でのアンケート・平和募金への協力もたくさんの方たちが応えてくれた。初日での地方紙取材が報道された十七日は、県下各地(県外からも数人)からの訪れがみられた。かつて自分たちが漁に励んだ船の姿・徴用犠牲になった仲間たちの実相を伝える写真類や海の地図を食い入るように、また涙して見入る元乗組員や遺族の姿が印象深かった。

第五福竜丸事件―乗組員と市民との様々な接点―を伝える当時のマスコミ報道から、教育現場の平和を考える実践の克明な記録等の数多い展示は、当時に生きた人々の思い出を呼びさまし、子どもたちや若い父母たちの関心をより高めるものとなった。

「よく開いてくれた・待っていた。もっと長く展示しておきたい。子どもたちが平和を学べる大切な場だと思っ。展示の常設の場が焼津にほしい。来年もぜひ」等のたくさんの声々。開催できた喜びと継続する責務を一層痛感して、小報告の終わりとしたい。「平和のための戦争展実行委員会」

つねに新しい時代を開きつづけてきた生涯

― 田沼 肇さんを偲んで ―

山村 茂雄

第五福竜丸平和協会顧問の田沼肇さん(日本原水協代表理事、法政大学名誉教授)が八月九日に亡くなりました。七四歳でした。

田沼さんは一九四八年東京大学経済学部卒業、商工省調査統計局入省。五〇年法政大学大原社会問題研究所に就職、六四年から法政大学社会学部教授、同学部長を経て九三年退職、名誉教授でした。

田沼さんは、「事実を明らかにして議論を組み立てていく学問の方法を」研究・実践活動の中で貫かれ、労働者階級の立場から労働者の学習運動、平和・原水爆禁止運動、特に被爆者援護連帯運動、国家補償としての法の確定や施策の推進の理論的作業に精力的にとりくまれました。

田沼さんは、第五福竜丸が東京夢の島で(廃船)とされて発見された一九六八年から第五福竜丸保存運動に参加され、船の所有権者からの譲渡交渉などにもあたりました。六九年第五福竜丸保存委員会発足以後は常任委員、七三年第五福竜丸保存平和協会(後に平和協会)結成以後は協会理事として第五福竜丸展示館の建設、第五福竜丸被災関係の資料収集、展示館の運営・管理、参考資料

の出版・広報活動を推進されました。

一九七六年の第五福竜丸展示館の開館に先だって刊行された平和協会編の『ビキニ水爆被災資料集』(東大出版会)では、四年に及んだ編集作業の中心として、各章の概説・執筆・編集にあたりました。「資料集」は、ビキニ事件を知るための基本資料ですが、後に田沼さんは「資料集は基本的な文献だがこれだけでビキニ水爆事件の全容が解明しつくされているとはいえない―全容が解明され、理解されればされるほど―核兵器のない平和と幸福な世界への展望が強まるであろう」と資料収集の継続の必要を語っていました。

「資料集」編集作業の中で「新しい資料に接するたびに、言いようのない興奮を覚えた―その多くは原水爆禁止運動へのいっそう主体的な参加を促す迫力をもつものであった―」こと、またマシーナル諸島民などの被災報告書「ミクロネシア議会議事報告」の収録と関連して、「長い間、日本を含む帝国主義によって、たらい回しの支配を受けてきた太平洋諸島住民の傷を見せつけられたような感覚があった」とビキニ事件を重層的に捉える視点を示唆されていました。

八五年に協会編で刊行された『母と子でみる第五福竜丸』(草土文化)のあとがきには「第五福竜丸がいまの時代に生きる私たちに、何を語りかけているのかを」話し合い、「船を見つめる瞳をとおして、平和にたいする想い」を深めてほしいと書かれています。

「一九五四年、第五福竜丸のビキニ水爆被災事件が起こり、文字通り世論が広がった中で、私も、原水爆禁止の課題へ大きく目を開かれた。私はそのなかで科学生としての責任を果たしたいと考えるに至った。―科学生としての私がどんな活動をしたかという、広島・長崎の被爆者の実態調査、社会科学的な原因の究明、被爆者の実相を社会的にアピールすることなどだった、一九九一年法政大学における最終講義のメモはこのように記されています。

一九八八年、田沼さんは「進行性核上性まひ」を発病します。この病気の原因は不明で有効な治療法が発見されていない神経難病です。徐々に身体の機能が衰えていくなかで、日常を田沼さんは「自身障害者となったことは、社会の矛盾がもう一つ明らかになる窓が開かれた」と述べたのでした。

一九九六年には、東京都の重度心身障害者手当認定却下に対して、その取り消しを求める行政訴訟を起こします。裁判は重度心身障害者の認定が実態に沿って行なわれること、障害者介

護の理解などを問うものでした。裁判は二〇〇〇年三月最高裁での上告棄却(田沼さんの提訴棄却)で終結しましたが、その間、田沼さんは地裁、高裁をとおして口頭弁論に車椅子で出廷しました。裁判の提訴と弁論は、人権としての社会保障、福祉行政、介護制度を見据えて多くの問題を提起し教訓をのこしました。提訴にあたって田沼さんは「(国民の不断の努力)を尽くしたい」とその気持ちを述べましたが、提訴を促したのは「原爆と真つ向から向き合い、たたかう被爆者の生きる姿勢」とも述べていました。(文中の引用の多くは、田沼さんの著書『私のなかの平和と人権』一九九五年刊によっています)。

八月一日と二日に「故田沼肇さんとお別れする会」が行なわれましたが、参加した被爆者運動の友人たちは、亡くなられた日が八月九日であったこと、その思いを語っていました。日本フィル楽団員の演奏のなか参加者が献げた花に包まれ、大好きだったお酒がそそがれた柩には、田沼さんが積極的に支援してきた原爆症認定の長崎原爆松谷訴訟、最高裁判判決文も添えられていました。

つねに「新しい窓」を開きつづけて、実践活動の日常に生きた田沼肇さん、その生き方に学ぶ日常でありたいと切に思います。(8・23記) (第五福竜丸平和協会理事)